日本人の生きる力

犬山・寂光院山主
松平實胤（まつだいらじついん）



春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえてすずしかりけり

これは道元禅師のお歌です。日本の四季の美しさを三十一字に詠み込んでおられます。一九六八年ノーベル文学賞を受賞された川端康成氏がストックホルムの記念講演でこの道元禅師の歌を引き、「美しい日本の私」と題して講演をされました。なるほど寂光院も全山が国定公園という風光に恵まれたところですので、四季の自然の姿は趣深く美しいです。また日本は二十四の季節をもつ国（二十四節季）と言われます。日本人はほのかな風の香り、水のぬくもりに季節を感じ取る敏感なまでにする自然に対して日本人特有の生き方のコツ、智恵というものが知らず知らずのうちに日本人に刷り込まれ、それが「生きる力」の源として伝承されてきたのでしょう。

「諦観―あきらめて、あきらめない」

それは間違いなく仏教の「無常観」、「諦観（ていかん）」にもとづくものであると思います。諸行無常は「およそこの世に存在するもので同じ状態にとどまるものは一つもない」ということであり、諦観は「現実をありのままに観る、納得する、悟る」ということです。例えば、津波で家族を失い、家を失い、町が流された現実をありのままに諦め（あきらかに見、納得する）れば、そこから先は（相手が敬いと感謝と畏怖の対象の自然なら、）その状況を呪うことなくそれを乗り越えて前に進む以外に道はありません。日本人は有史以来、天災地変に見舞われる度毎に、また戦火にさいなまれる度毎に、立ち直り、復興する、その繰り返しが日本の歴史であったといってもよいでしょう。

「日本人の生きる力」は日本の自然とともに育まれてきたのだと思います。それは現実を『あきらめ（明らかに観）』れば、しばらく力を落としてやる気を失っても、早晩それを乗り越える、やり抜く、『あきらめない』」ということでしょうか。

どい感受性に優れているのでしょう。

「敬いと感謝と怖れ」

また自然の恵みはとても豊かで、海の幸、山の幸、おいしいものに囲まれて生きてきました。ですから、日本人は古来より自然を敬い、自然に感謝し、自然を慈しみ、自然と共に生きてきたという長い歴史があります。

一方、日本は地震、津波、台風、豪雨、火山爆発、とにかく人智の到底及ばない、人が抗うことのできない天地自然の計り知れない力に畏怖の念を抱き続けてまいりました。ですから、

QRコード
必見！！　寂光院ホームページ　www.jakkoin.com